

TOKYO PAPER

トーキョーペーパー

for Culture

フォーカルチャー

美しく賢いもの、快適で利便性のある暮らしを追求するなかで、生まれる文化がある。同時にそこからこぼれ落ちる、古くて不便なもの、弱くて醜いもの。そこから生まれる文化もある。暮らしのなかで巻き起こるさまざまな喜怒哀楽も、街のどこかで思わぬ作品と出合って心震える体験も、同じ一線上にあって、きっと繋がっている。なぜなら文化とは人の営みそのものだから。東京文化を考えることは、自分の生き方を見つめること。なんてことを思いながら、季節は夏。この街を日々散策、研究を重ねて『TOKYO PAPER for Culture』は第五号目を迎えました！今号もよろしくお願いします。

The pursuit of a life filled with things that are beautiful and smart, comfortable and convenient gives rise to a culture. The things that fall away in this process are the old and the inconvenient, the weak and the ugly. These give rise to another culture. The whole gamut of human emotions that surround us in our daily lives, and the experiences that stir our hearts as we unexpectedly encounter the things that people have created all across this city are undoubtedly all connected, as part of the same continuum. That's because culture is human activity itself. Thinking about the culture of Tokyo means looking at the ways in which we live our lives. While we think such a thing, summer has come. We hope you enjoy it!

第五号／005

東京ハレとケ物語

TOKYO CULTURE WALK
ブンプロの文化プロジェクトを散策

東京センチメンタル

モーリー・ロバートソン (ジャーナリスト) × 西 加奈子 (作家) × ユザーン (タブラ奏者)

研究テーマ⑤：花街文化の心意気

～芸者という生き方～



都内に4軒残る落語定席のなかでも、唯一の木造建築として知られる、新宿末廣亭。そこへ最初に到着したのは西さんでした。間もなくしてモーリーさん、そしてユザーンさんが到着し、早速、末廣亭～花園神社～ゴールデン街～新大久保コリアンタウン散策へ。この日が初対面となったお三方ですが、モーリーさんの即興トークを軸に、笑いの絶えない現場で、我々、研究員からもサッと質問。「客員研究員のみなさま、世界のなかで、日々のなかで、東京はどう映っていますか？」

西 加奈子 (以下西)：イラン、エジプト、大阪、東京と暮らしてきましたけど、大阪が一番長いから、「故郷は？」という、やっぱり大阪。ただこの10年は東京で暮らしてきて、この街のいいところもいっぱい知りました。私の場合、友達ができたらその街のことが好きになるので、そういう意味でも、東京は好きです。

ユザーン：友達がいると好きになるんですか。僕もカルカッタやムンバイに友達はたくさんいるけど、街自体はあんまり好きじゃないな(笑)。腹が立つことも多いし、何かもうあそこだけ地球から切り離して衛星にして回しておきたいぐらい……。

西：何があったんですか(笑)。

ユザーン：ありすぎて、思い出せない(笑)。

モーリー・ロバートソン (以下モーリー)：僕も若い頃インドに行ったけど、熱と下痢でうなされて、ほとんどホテルから出られなくなって。

西：インドは危険なことがあった自慢、で

きますよね。インドに住んだ人は無条件に強そうなイメージもありますし。

ユザーン：たしかにお腹ぐらいは強くなるかもしれないですね。話が逸れましたけど、僕は東京に対して好き嫌いの感情はあまり持ってないです。ただ、東京にいないと仕事が成立しにくいんですよ。仲間のミュージシャンも、やっぱり圧倒的に東京に住んでいる人が多いですね。

モーリー：僕が10代で富山の田舎から上京するときは、東京にはあこがれの目線が強かった。どうやって友達を作ったら良いのかもわからなくて葛藤して。今もその印象が残っているところがあります。

西：東京という言葉は、センチメンタルな響きがありませんか？ 私、芸人の又吉直樹さんが書かれたエッセイ『東京百景』が大好きなんですけど、これが例えば『大阪百景』だとグリコが思い浮かんで、一気にセンチメンタルじゃなくなって(笑)。あと、東京は知り合いに会わずに住んでいける街だと思うんです。大阪は日本の“第2の都市”って言われていますけど、それでも狭い。呑み屋街も大体決まっているから、2軒目にタクシーで向かうなんて、考えられへん。でも東京だと渋谷で飲んだ後、「恵比寿行こう」って、ありますよね。その、東京のいろんな地域がそれぞれに栄えているということが、結構びっくりで。それによってどこで呑んでいても顔ささへんから。大阪やったら知り合いに会ってしまふ。それが心地よかったり、窮屈やったり。

ユザーン：顔ささない？

西：こっちでは通じません？ 知り合いと

東京センチメンタル

2020年東京五輪に向けて、改めて世界から見た東京の姿が問われ、関心が集まっています。あなたの目には、東京はどう映っていますか？ そこで今回の東京文化座談会には、国際経験が豊富でユーモアに富んだ表現者、モーリー・ロバートソンさん(ジャーナリスト)、西 加奈子さん(作家)、ユザーンさん(タブラ奏者)を“客員研究員”としてお招きしました！

As the 2020 Tokyo Olympics and Paralympics approaches, there is renewed interest in Tokyo's image in the eyes of the rest of the world. How does Tokyo appear to you? To explore this question, we invited three leaders in the field of the expressive arts to participate in a round-table discussion of Tokyo culture as “guest researchers”. Journalist Morley Robertson, author Kanako Nishi, and tabla player U-zhaan all have abundant international experience and a humorous outlook on life.



かと誰にも会わない、みたいな意味で。

モーリー：その“顔をささない”ことが、東京の孤独感にも繋がっていますよね。

ユザーン：僕はタブラという楽器を選んだ時点からなぜか孤独な感じがあるんです。どこに行ってもアウェイな気がするとか。

モーリー：でもユザーンさんとコラボすることで、何かそこに即興性やアクシデントをみんな求めているじゃないですか。

ユザーン：そうなんですかね？自分が何を期待されているのか未だにわかっていないんですけど。でも東京の人口の多さ、芸術に対する関心の高さはすごいなあと感じます。たとえ東京だけで月に20本ライブをやったとしても、どの会場にもお客さんがきてくれるし。ほかの街でそんなに(本数を) やっても人は入らないですよ。まあ何だかんだ言って、東京の人はお金があるのかもしれないです。

西：「友達やから、タダで入れて」の、大阪によくある関係性も好きやけど、東京の“お金ありぎ”みたいな感覚は、私は好き。お

金を払う、お金が動くということが大前提にあるのは、気が楽です。お金がきつかけでだめになるのって、すごく悲しいから。

モーリー：大阪の場合、対象に対して「すごく好きやねん！」っていう丸出し感というか、その純粋さで成立しているものが多い気がして。一方の東京は純粋さに加えて、伝えるためにはどう宣伝する？どうしたらお金が儲かる？みたいな、戦略を感じるものが多い印象ですね。

ユザーン：自分を突き詰めていく気持ちとは別に、他人からの見え方、見られ方を気にしている感じが東京にはありますよね。「こういうふうに、見えるようにしよう」と、第三者がいるような街。

文化にもっと多様性を！

モーリー：東京ってアノニマスな印象があって。例えば演じる側も観る側も「主催者と親しいから出演する」「友達を作りたいから観に行く」とか、各々の関係性が

ら始まるよりも、「私の提供するコンテンツのクオリティーは90分間で5,000円です」「そのクオリティーならお金出します」という、お金で価値を峻別して、契約関係をビシッと結んでいる印象の方が強くて。だから「5,000円は高いけど、価値はある」と思ってもらうために、宣伝も魅力的に工夫してね。結果、高額でもそれなりに席は埋まる。そういうある種ドライな取引関係が、東京文化を作っている側面があって、でもそれは、僕はすごくクールだと思う。

ユザーン：東京の文化、たとえば、六本木のスーパーデラックスは、東京の塊みたいな感じがして、ずっとアンダーグラウンドシーンを支えている気がします。

西：うん、東京らしい感じがします。

モーリー：あそこは感度が高く、お金が取れる街ってことをわかっていて、上手に運営している印象があるなあ。東京は資本主義の厳しいルールに順応している街で、お金は大切。僕はバブルの崩壊後、フリーランスになって仕事が入らない年月を

経験したこともあって、お金のありがたみが身に染みている。そのため、今は欲深いんです(笑)。被災地の復興も切り離して考えては、絵空事になってしまう。日本全体の景気回復と私自身が金持ちになる。この三者を同時進行させないと継続できずに息切れすると思うんですよ。おふたりは「経済的にでっかいこう!」とか、そういう夢は見たりしますか？それとも好きなことをとことんやるという感じですか？

西：私、作家になるまでずっとアルバイト生活していて、就職活動もしていないんですよ。当時は就職氷河期だったので、フリーターしていても目立たへんっていうか。そういう時代やから、逆に就職して稼ぐことよりも好きなことを追いやすかったかもしれません。今振り返ってみると、それはラッキーだったなって。

モーリー：変な競争がない、と。

西：そうですね。今、作家の世界でも同世代はとても仲が良いです。上の世代の方たちに、「何であなたたちはそんなに仲い



Morley Robertson



いの？」って驚かれるんですけど、本が売れない時代だから、「私が、私が」やったら、だめで。だから、山崎ナオコーラさんや綿矢りささんや、同世代の作家同士、「とにかくみんなでいいものを書いて、売り場を増やそうよ!」って言いながら、お互いに励んでいます。それはきっと上の世代の方たちから見たら、「つまらん、野心がない」と思われているかもしれません。

ユザーン：僕も不況が当たり前のなかで活動しているから、これだけ稼ぎたい、みたいな強い野心はないです。CDが売れなくなった、とよく言われますが、音源を買うという習慣そのものがなくなっている感じがですね。

モーリー：EXILEも聴くけど、ジェイムス・ブレイク^(※1)も聴くみたいな、文化に対する多様性をもっと欲しい。

ユザーン：Ametsub^(※2)って知ってます？ダブ・ステップっぽいトラックもあってすごくカッコいいですよ。

モーリー：本当!! 聴いてみます!

西：聴いてみたい。

モーリー：今日おふたりと歩いた末廣亭やゴールデン街のような街並みも残って欲しいし、でも同時にガッツがある若い発

想で生まれた個人商店が経済原則に巻き込まれて面白く回転してくれたらいいな。とにかくいろんな文化がクロスオーバーして欲しいんです。

ユザーン：まだまだ行儀よく住み分けられている気はしますね。

西：あと、東京は女性に優しい街であって欲しい。例えば妊婦さんが大変そうに大きな荷物を持っていたり、男性はナンパだと思われたくないから、声かけるのをためらってしまうんですって。思いやりの気持ちはあるのに。だから男性が女性に「大丈夫ですか」ってナチュラルに声をかけることができるような街になったらいいなって思います。

モーリー：思いやりが、社会を作る。

ユザーン：あの、今日のテーマである東京、国際性、とかから色々脱線したままなんですけど大丈夫でしょうか(笑)。

※1 シンガー・ソングライター。UKクラブ・シーンで人気に火がつき、2011年発表のメジャー・デビュー・アルバム『ジェイムス・ブレイク』が大ヒットを記録する。

※2 東京を拠点に活動する音楽家。2003年発表のコンビ『forma 2.03』に参加後、『Linear Cryptics』でアルバム・デビュー。これまで3枚のアルバムを発表。



So Tokyo's a city where you don't get spotted, then.

Kanako Nishi

U-zhaan



Kanako Nishi: I've lived in Iran, Egypt, Osaka, and Tokyo, but when people ask me where I'm from, I tend to say Osaka, because that's where I lived for longest. However, I've been living in Tokyo for the last ten years and I've discovered many good things about this city. I start to like a place if I make friends when I'm living there, so I like Tokyo in that sense as well.

U-zhaan: You like a place if you have friends there? I've got lots of friends in Kolkata and Mumbai, but I don't really like the cities themselves <laughs>. There are many things that make me angry there – to the extent that I want to separate those two cities from the Earth completely and send them off into space as satellites....

Kanako: What happened <laughs>?

U-zhaan: Too many things for me to recall.

Morley Robertson: I went to India when I was young, but I was hardly able to leave

my hotel because I got a fever and diarrhea.

Kanako: You can boast that you experienced danger in India, can't you? After all, people who've lived in India definitely have an image of being strong.

U-zhaan: Your stomach certainly becomes stronger, at least, I suppose. We've deviated from the point, but I don't really have any strong feelings either way about Tokyo. However, it would be difficult to succeed in my work without being in Tokyo. After all, the overwhelming majority of the musicians I work with live in Tokyo.

Morley: When I used to come up to Tokyo from the countryside of Toyama where I lived in my teens, I really longed to be part of Tokyo. I was conflicted, because I didn't know how to make friends. It still has lingering traces of that impression for me, even now.

Kanako: Don't you think that the word "To-

kyo" sounds somehow sentimental? I love the essay collection *Tokyo Hyakkei* [One Hundred Views of Tokyo] by the comedian Naoki Matayoshi, but if someone wrote a similar book about Osaka for example, the image of the Glico runner would spring to mind and you'd instantly stop feeling sentimental <laughs>. I also think that Tokyo's a city where you can live without meeting any acquaintances. Osaka's said to be Japan's second city, but it still has a small-town feel. Most of the bars are located in the same area, so going on to a second bar by taxi would be unimaginable. But in Tokyo, after drinking in Shibuya, it's quite normal to say something like "Let's go to Ebisu next", don't you think? I was quite surprised by how the various districts of Tokyo each prosper individually. So no matter where you're drinking, you just don't get spotted [Kanako used the ex-

pression "kao sasahen", which is peculiar to the Osaka dialect].

If it was Osaka, you'd definitely get spotted by someone you knew.

U-zhaan: Kao sasahen?

Kanako: Ah, you're not familiar with the



Tokyo Sentimental



term up here? It's probably Osaka dialect – I mean you don't just happen to be seen by someone you know by chance.

Morley: That phenomenon where you don't get spotted by people you know does lead to a sense of isolation in Tokyo.

U-zhaan: Somehow, I've felt isolated ever since I took up the tabla. Or rather, no matter where I go, I've felt apart from others.

Morley: But surely everyone who collaborates with you is aiming for some kind of improvisation in doing so?

U-zhaan: Do you think so? I still don't know what people are expecting of me. But I'm still amazed by the scale of the population in Tokyo and the depth of people's interest in the arts. For example, even if I do 20 live performances a month in Tokyo alone, people are still kind enough to fill all of the venues. If I did that many performances in

other cities, people wouldn't come. Well, after all, perhaps it's that people in Tokyo have money to spare.

Kanako: I do like the sense of connection you often get in Osaka, where you can say, "I'm a friend, so let me in free", but I also like the focus on money in Tokyo. You feel reassured when the basic premise is paying money and the movement of money.

Morley: In the case of Osaka, I get the feeling that things often succeed because people don't disguise their feelings and are honest about what they think – they'll say "I adore it!" On the other hand, while there's a sense of honesty in Tokyo as well, you still often get the impression that there's a strategy, in terms of how to advertise it and how to make a profit.

U-zhaan: Apart from taking themselves seriously, people in Tokyo do have a tendency to worry about how others see them. It's as though there's always a third party in this city – people think "Let's make it look like this".



More diversity in culture!

Morley: Tokyo gives the impression of anonymity. For example, rather than each relationship beginning from the performer and the spectator thinking "I'm friendly with the organizer, so I'll appear in it" or "I want to make friends, so I'll go and see it", there's a strong sense that rigorous distinctions are made in terms of value on

the basis of money, such as “The quality of the content I provide is worth 5,000 yen for 90 minutes” or “If this is the quality, then I’ll pay for it”. You get the impression that there’s a strictly-defined contractual relationship. That’s why people try to devise ways of making the advertising attractive as well, so that people think, “5,000 yen’s expensive, but it’s worth it”. As a result, the seats get filled, even if the tickets cost a lot. Although this rather dry business relationship has aspects that shape Tokyo’s culture, I do think it’s really cool.

U-zhaan: If we’re talking about Tokyo culture, SuperDeluxe in Roppongi seems to be Tokyo through and through, and I get the feeling it has consistently supported the underground scene.

Kanako: Yeah, it does feel typically Tokyo.

Morley: I get the impression that they’re doing a good job of running it, with a high level of sensitivity and an understanding that you can make money here. Tokyo’s a city that has adjusted to the strict rules of capitalism, so money’s important. After the collapse of the economic bubble, I started freelancing and there were long periods when I had no work at all, so I’m deeply aware of the value of money. That’s why I’m

really miserly now <laughs>. When it comes to the reconstruction of the disaster-stricken areas as well, it’s absurd to consider the issue in isolation from the question of money. Economic recovery throughout Japan will make me richer as well. If we don’t promote these three things simultaneously, we’ll run out of steam and won’t be able to continue. Do you two ever dream of doing things on a grand financial scale? Or do you prefer to focus entirely on the things you enjoy?

Kanako: Until I became an author, I was living entirely off what I made from casual work, so I’ve never even engaged in job-seeking activities. That was the time of the employment ice age, so it wasn’t even considered unusual to be a part-time job-hopper. Because it was that kind of era, it was perhaps actually easier to pursue the things you enjoyed, rather than finding a job and earning a living.

Morley: There wasn’t any strange sense of competition, you mean.

Kanako: That’s right. Now, even in the writing world, all of us from the same generation get on really well. The older generation are surprised and say things like “Why are you lot so friendly with each other?”, but

because it’s an era when books don’t sell as well as they used to, we’d be finished if we were all “me, me, me”. That’s why Nao-ola Yamazaki and Risa Wataya and other writers of our generation encourage each other, saying, “Let’s just all write something good and increase the number of places that sell our work!”

U-zhaan: I’ve pursued my own activities with the recession as a fact of life and I have no strong desire to make a certain amount of money. I’m often told that CDs aren’t selling anymore and I get the feeling that the custom of buying a source of sound is itself dying out.

Morley: I’d like to see a more mature musical literacy developing in Japan, both among listeners and among those who sell music. I’d like them to cultivate greater diversity, so that people might listen to EX-ILE, but they also listen to James Blake, for example.

U-zhaan: Are you familiar with Ametsub? Some of the tracks have a dubstep feel to them and they’re incredibly cool.

Morley: Really?! I’ll have a listen!

Kanako: I’d like to listen to it.

Morley: I’d like the city to preserve street-scapes like Suehiro-tei and Shinjuku Gold-

en Gai, where we’ve been walking today, but at the same time, it would be good if the privately-owned shops that have emerged from the gutsy ideas of young people could become intertwined with economic principles and be turned around in an interesting way. In any event, I’d like to see crossovers between a variety of cultures.

U-zhaan: It does rather feel like everyone is neatly compartmentalized and segregated.

Kanako: Also, I’d like Tokyo to become a woman-friendly city. For example, even if men see a pregnant woman struggling to carry some heavy piece of luggage, they’re hesitant to offer their help, because they don’t want her to think they’re trying to chat her up. The consideration for others is there, but.... That’s why I’d like to see Tokyo become the kind of city where men can naturally say to a woman, “Are you OK? Do you need any help?”

Morley: Consideration for others is what creates a society.

U-zhaan: Um, I think we’ve strayed quite a long way off course from our original themes for today – Tokyo and openness to the world. Is that OK? <laughs>.



西 加奈子 Kanako Nishi

1977年テヘラン生まれ、カイロ、大阪育ち。2004年『あおい』でデビュー。著書に『さくら』『きいろいゾウ』『円卓』『漁港の肉子ちゃん』などがある。『通天閣』で織田作之助賞受賞、『ふくわらい』で第1回河合隼雄物語賞を受賞。最新作は『舞台』。

Born in Teheran in 1977, raised in Cairo and Osaka. Published her debut novel *Aoi* in 2004. Other books she has written include *Sakura*, *Kiiroi Zou*, *Entaku*, and *Gyokou no Nikuko-chan*. Won the Oda Sakunosuke Prize for *Tsutenkaku* and the first Kawai Hayao Story Prize for *Fukuwari*. Her latest novel is *Butai*.

モーリー・ロバートソン Morley Robertson

1963年ニューヨーク生まれ。これまでJ-WAVE『Across The View』をはじめ、様々なメディアに独自の世界を展開。2005年からはポッドキャスト番組『i-morley』を開始。政治、社会問題、芸術などの話題を扱う。現在、block.fmにレギュラー出演中。

Born in New York in 1963. Has used a range of media to provide an insight into his unique world, most notably the radio program “Across The View” on J-WAVE. Launched his “i-morley” podcast in 2005. Deals with topics including politics, social problems, and the arts. Currently appears regularly on block.fm.

ユザーン U-zhaan

1977年埼玉生まれ。オニンド・チャタルジー、ザキール・フセインに師事。2000年“ASA-CHANG&巡礼”に加入し、4枚のアルバムを発表。2010年脱退。レイ・ハラカミを始め、様々なアーティストと制作を行う。著書に『ムンバイなう。』『ムンバイなう。2』がある。

Born in Saitama in 1977. Studied with Anindo Chatterjee and Zakir Hussain. Joined Asa-Chang & Junray in 2000 and released 4 albums with the group. Withdrew from the group in 2010. Has collaborated with Rei Harakami and a variety of other artists. Author of *Mumbai Now* and *Mumbai Now 2*.





息づく文化を
感じる

Feel the living
pulse of culture

東京の文化
散策に出発!!

I'm off on a
Tokyo culture walk!

1 Puppet Theatre

三輪の箱車に乗って人形を動かす!
Puppeteers sit on three-wheeled boxes
while they move their puppets!

2 Art of Supremacy

伝統芸能に馴染みのない
人にこそ触れてほしい
We want to connect with people who don't
know so much about traditional culture

人間国宝の
御三家が
勢ぞろい

Three Living
National Treasures
under one roof

伝統文化って
気軽に楽しめるんだ
I never knew traditional culture
could be so easy to enjoy!

3 Japanese Comedy

狂言=古典のコント?
Kyogen=Classical comedy skits?

広報ディレクター
森 隆一郎
Public Relations Director
Ryuichiro Mori

文化がコミュニティを
つないでいく
Culture creates communities

東京、文化散策

人の営みそのものである、文化。東京でも、多様な文化が日々生まれ育っています。人と文化のより良い付き合いとは何かを模索し、世界的な文化創造都市・東京の実現に向け、様々なプログラムを実施しているブンプロ。文化研究所であるこの紙面上で、文化研究員が散策(=研究)しながら、ブンプロの年間プロジェクトを視察していきます。

“Culture” is what people do—and it’s constantly developing and diversifying in Tokyo. BUNPRO* organizes programs designed to seek out the ideal relationships between people and culture and make Tokyo into a city of cultural creation in the global arena. As a “cultural research institute” in paper form, this issue follows our “cultural researchers” as they walk around (research) the city and profile BUNPRO’s projects for the year.

* BUNPRO is a nickname of Tokyo Culture Creation Project

TOKYO CULTURE WALK

ブンプロが主催する文化プログラムは、以下の4本柱から構成されています。

BUNPRO will produce several cultural programs, building around the following four main projects.

FESTIVAL フェスティバル	KIDS/YOUTH キッズ/ユース
ARTPOINT アートポイント	NETWORKING ネットワーキング

1 東京発・伝統WA感動 8.29 (Fri)
伝統芸能 八王子車人形の世界

Tokyo Traditional Arts Program
The World of Hachioji Kuruma Ningyo, a folklore puppetry

江戸時代から八王子に伝わる伝統芸能、車人形。美しい娘の人形が恋に身を焦がす「日高川入相花王」、人情話の傑作で芸妓とコラボレーションした「文七元結」をいちょうホール(八王子)で上演。

This program introduces audiences to Hachioji Kuruma Ningyo, a part of the Hachioji culture since the Edo period, through two performances: “Hidakagawairiaizakura”, in which a beautiful girl puppet burns with the passion of love, and “Bunshichimotoi”, a collaborative take with geisha performers on the classic human-interest story.

2 東京発・伝統WA感動 10.28 (Tue)
至高の芸、そして継承者〜狂言

Tokyo Traditional Arts Program
Kyogen ~ Supremacy and Successors

至高の芸を持つ狂言界の人間国宝、野村万作、山本東次郎、野村萬の3人と、彼らのもとで修業に励む継承者たちによる公演。それぞれのお家の得意演目を、国立劇場大劇場で披露します。

Mansaku Nomura, Tojiro Yamamoto, and Man Nomura—Japan’s three Living National Treasures of the kyogen world—have set the standard of kyogen supremacy. Their successors, meanwhile, have trained diligently to carry on their masters’ proud tradition. This program unites the “supremacy” and the “successors” at the National Theatre.

3 東京発・伝統WA感動 10.7 (Tue)
日本の笑い—古典と現代

Tokyo Traditional Arts Program
Japanese Comedy—traditional and contemporary

国立能楽堂を舞台に、狂言師の野村万蔵が狂言ならではの表現や型の魅力をトークや実演で紐解きます。ドロンズ石本やヒロミチお兄さんと佐藤弘道を迎え、コントと狂言の融合に挑戦します。

Kyogen performer Manzo Nomura will take the stage at the National Noh Theatre to delight the audience with stories, explanations, and demonstrations of the modes of expression unique to kyogen. The event will also welcome Dronz Ishimoto and Hiromichi Sato for an exciting fusion of the kyogen and comedy skit styles.

未来の文化伝道者を
育成する

We want to raise the cultural
messenger of the future

ブンプロ室長
江川秀章
Senior Director
Hideaki Egawa

もっともっと
体験するぞ〜
We're just getting started!

Kids x Traditional Arts

今年で7年目
本格的な
和のお稽古!

Now in its seventh year,
this event gives participants
a taste of authentic
Japanese-style training!

文化の極みを
体験する

Experiencing the
ultimate in culture

Japanese Tea Ceremony

5 TERATOTERA

高円寺〜国分寺駅間で
現在進行形のアートを発信

Showcasing progressive art
from Koenji Station to Kokubunji Station

世界へ伝える
“おもてなし”の心

Demonstrating the spirit of
“omotenashi” (hospitality), to the world

4 Art Meeting

第5回目の総合
アドバイザーは野村萬斎!
The general advisor for Tokyo Art Meeting V
is none other than Mansai Nomura!

東京アートポイント計画ディレクター
森 司
Tokyo Artpoint Project Director
Tsukasa Mori

東京の多様性・地域性を
活かしたプロジェクトを展開しています
We're working on projects
that make the most of Tokyo's
diversity and local character

東京アートミーティング (第5回)

Tokyo Art Meeting V

9.27
(Sat)
↓
2015. 1.4
(Sun)

野村萬斎を総合アドバイザーに迎え、「アート・身体・パフォーマンス」をテーマに、伝統から現代までクロスオーバーしながら多様な身体表現の可能性を探ります。東京都現代美術館を中心に開催。

With Mansai Nomura as general advisor, Tokyo Art Meeting V will explore the possibilities of a diverse range of physical expression, stretching from traditional to contemporary and crossing over time periods and genres, around the theme of “Art - Body - Performance”. Many of the events will be held at Museum of Contemporary Art Tokyo.

5 TERATOTERA

TERATOTERA

吉祥寺を拠点に、JR中央線高円寺駅から国分寺駅間を中心に現在進行形のアートを発信する地域密着型アートプロジェクトです。「テラッコ」と呼ばれるボランティア主体の企画なども多数実施。

Based in Kichijoji, TERATOTERA is a community-centric art project that aims to showcase ongoing arts in the area between Koenji Station and Kokubunji Station on the JR Chuo Line. The project also does a wide variety of planning, including projects for TERAKKO, a volunteer group.

6 東京大茶会 2014

Tokyo Grand Tea Ceremony 2014

(a) 9.27-28
(Sat-Sun)

(b) 10.11-12
(Sat-Sun)

9月に江戸東京たてもの園 (a) で、10月に浜離宮恩賜庭園 (b) で大規模な茶会を開催。茶席や野点の他、(a) では子供向けの茶道教室、(b) では外国人向けのイングリッシュ野点などを楽しめます。

This event will be held in the Edo-Tokyo Open Air Architectural Museum (a) and Hama-rikyu Gardens (b). In addition to offering cha-seki (indoor tea ceremonies) and nodate (outdoor tea ceremonies), the events will also feature tea ceremony workshops for children (at site (a)) and Outdoor Tea Ceremony in English (at site (b)).

7 キッズ伝統芸能体験

Traditional Performing Arts for Kids

8月
Aug.
↓
2015. 3月
Mar.

能楽や日本舞踊、三曲、長唄の伝統芸能を一流の芸術家から子供たちが直接指導を受け、その成果を舞台で発表。伝統芸能に親しむとともに、次世代への継承を目指します。中高生限定コースも新設。

Children will receive direct instruction from leading artists in the fields of Noh, Nihon buyo, Sankyoku, and Nagauta, and they will give performances on stage. The project aims to give children an appreciation of traditional performing arts and enable them to carry on the spirit of the artistic heritage. New courses for youth are started.



伝統文化を見て、
知って、体験して！

See, know, and experience
traditional culture!

プログラムディレクター
山口紀子
Program Director
Noriko Yamaguchi

大人の
ワークショップ！

Workshops for adults!

9 Art Access

野村 誠
Makoto Nomura

千住の魚市場で、
1,010 人の音楽祭!?

1,010 people in the Senju
fish market for a music festival!?

作曲家、鍵盤ハー
モニカ・ピアノ奏者。
「千住じゃれ音楽
祭」ディレクター

Composer, melodic
player, pianist, and
“Senju Pun-filled Mu-
sic Festival” director

10 Art Station

中崎 透
Tohru Nakazaki

街のひとりひとりが、
アートの主役

Everyone in the community
plays the lead role in art

美術家。水戸市内で遊戯室
(中崎透+遠藤水城)を運営中
Artist and proprietor of a playroom
(Tohru Nakazaki + Mizuki Endo) in
Mito, Ibaraki

EAT&ART TARO

アーティスト。
食をテーマに活動中
Artist with a focus on
food-themed projects

11 Topping East

子供ガムラン隊、結成！

Meet the children's gamelan!

新たな
東京文化を
つくる

Creating new
Tokyo culture

広報ディレクター
森 隆一郎
Public Relations Director
Ryuichiro Mori

東京が、文化を通じて
親しみやすい街になっていく

Culture is the key to making
Tokyo a more approachable place

8 東京発・伝統WA感動
能～伝統の発見～

10.13
(Mon)

9 アートアクセスあだち
音まち千住の縁

Art Access Adachi:
Downtown Senju - Connecting through Sound Art

10 としま
アートステーション構想

Toshima Art Station Koso

11 トッピングイースト

Topping East

仕舞、謡、囃子といった能楽のエッセンスを体験で
きるワークショップと舞台鑑賞をセットにした喜多
能楽堂でのプログラム。驚きから生まれる「発見」
で、改めて伝統の力を感じてみませんか。

This program at the Kita Noh Theatre combines
workshops on the essentials of Noh—shimai (dan
cing), utai (chanting), hayashi (musical accompani-
ment)—and performances to spark the wonder
of discovery and show participants the power of
tradition.

足立区千住地域で、アートを通じた新たなつなが
りを生み出すために、「音」をテーマに多様なプロ
グラムを展開。作曲家・野村誠と「千住じゃれ音
楽祭」での「千住の1,010人」などを企画。

Set in the Senju area of Adachi, Tokyo, this project
organizes a variety of programs with a “sound”
theme in hopes of fostering new connections
through art. Main program is the creation of a “1,010
People in Senju” at the “Senju Pun-filled Music
Festival”, a collaborative effort with composer Ma-
koto Nomura.

人と人、人と街をつなぎ、自発的なアート活動が生
まれる仕組みづくりを目指します。アートステー
ションZでEAT&ART TAROと、新設するアートステ
ーションYで中崎透とのプロジェクトが進行中。

Toshima Art Station Koso strives to create an en-
vironment that spurs self-motivated, unrestrained
art through connections among people and the
community. The initiative also includes projects
with EAT & ART TARO at Toshima Art Station Z
and Tohru Nakazaki at the new Art Station Y.

東京スカイツリー®のある東東京エリアで、音楽の
広がりを探るプロジェクト。子供たちにとって馴
染みの薄い楽器の楽団を結成する「ほくさい音楽博」
や公共空間での音楽プログラムを展開します。

Aiming to spread music around the East Tokyo
area, home to TOKYO SKYTREE®, the Topping
East project will form a musical troupe featuring
instruments that most kids have never seen and
hold the “Hokusai Music Fair” and sound-oriented
programs in public spaces.

新しい文化は日々
つくられているんだね

Look at all this culture!
There's something new every day!

文化はこうして
“てづくり” されていく

This, you see, is how people
make culture “by hand”

ブンプロ室長
江川秀章
Senior Director
Hideaki Egawa

14

Art Research Lab

アートプロジェクトは
無限の可能性を秘めている

Art projects are
full of infinite possibilities

13

Soup & Blanket Travelogue

演出家・劇作家。主宰する「指輪
ホテル」にて作品を発表する他、ワ
ークショップなども精力的に行う

Director and dramatist active in releas-
ing works through the YUBIWA Hotel
company and organizing workshops

終わりと始まり、その間を探す旅

A voyage through beginnings,
endings, and the space in between

羊屋白玉
Shirotama Hitsujiya

12

Diversion Research

生き抜くための術＝迂回路をつくる

Getting through life=Making diversions

社会の課題に应答する
新規プロジェクトがスタート
We're launching new projects to
tackle important social issues

詳しい内容は公式ウェブサイトで公開中！

Head to the official website for more information!

www.bh-project.jp

www.bh-project.jp/en

東京アートポイント計画ディレクター
森 司
Tokyo Artpoint Project Director
Tsukasa Mori

12

東京迂回路研究

Tokyo Diversion Research

障害やケア、労働、ジェンダー、国籍など社会における「多様性」と「境界」にまつわる課題に対し、フィールド調査と対話を通じて“生き抜くための技法”としての「迂回路」を研究します。

This project will explore elements of social diversity and boundaries, including disability, care, and nationality, and learn more about the “diversions” that people need to survive through field research and open dialogue.

13

東京スープと ブランケット紀行

Tokyo “Soup and Blanket” Travelogue

演出家・劇作家の羊屋白玉を中心に、生活圏に起こる物事の「終焉」と「起源」、そしてその間を追求するアートプログラムを展開。テーマに呼応するゲストを交えたトークシリーズなどを行います。

The focus of Tokyo “Soup and Blanket” Travelogue, led by theatre director and dramatist Shirotama Hitsujiya, is to organize art programs that offer a window on our spheres of existence in pursuit of “beginnings”, “endings”, and the spaces in between. The project will invite guests for a series of talk shows on the central themes.

14

Tokyo Art Research Lab (TARL)

Tokyo Art Research Lab (TARL)

アートプロジェクトを担う全ての人に開かれたラボ。社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指し展開。現場の課題に应答した研究開発プログラムの他、人材育成プログラムも充実。

This research program, open to everyone involved in organizing art projects, hopes to expand the potential of what art projects can do in society through a wide variety of human resource development programs and research and development programs geared toward real problems in the field.

ネットワーキング事業

NETWORKING Project

“世界的な文化創造都市・東京”を国内外に発信するため、秋に海外から文化芸術関係者を招聘し、国際会議や交流会を実施。友好都市提携20周年を記念し、ベルリンからもゲストをお招きする予定。

Various players in arts and culture will be invited from abroad for a conference and visitors program to communicate about “Tokyo as a city of global cultural creativity”. Guests from Berlin will also participate to commemorate the 20th anniversary of the friendship city relationship between Tokyo and Berlin.

BUNPRO Newsletter

ブンプロ便り

文化散策の途中、ポストの存在には気づきましたか？
ブンプロからの重要なお知らせ、お届けします。
On your culture walk, did you look in your mailbox?
You have important news from BUNPRO.

ブンプロのライブな情報をオンエア中！

Live BUNPRO information is on-air now!



渡辺 祐
Tasuku
Watanabe

山田玲奈
Rena
Yamada



J-WAVE (81.3FM)

『BUN-PRO TOKYO CREATIVE FILE』

オンエア日時：毎週土曜日11時35分～11時45分
(ワイド番組「RADIO DONUTS」内)

On Air: Saturdays, 11:35-11:45
(A segment of the "RADIO DONUTS" show)

<http://www.j-wave.co.jp/original/creativefile/>

TARLスクール、開講中！

The TARL School is in Operation!

official web site
tarl.jp

思考と技術と 対話の学校

Tokyo Art Research Lab (TARL) による「思考と技術と対話の学校」は、アートプロジェクトの運営に精通し、NPOなど事務局のコアメンバーとなる人材を育てるためのスクール。様々な講座やアプローチを通じて、社会的な課題を「思考」し、現場をつくる「技術」を知り、問題意識を共有する人々と「対話」するための能力を身につけていきます。

The Tokyo Art Research Lab (TARL) "Thought, Skill and Dialogue" exists to acquaint people with the management of art projects, and to foster human resources, people who will act as core members in the administration of NPOs and similar organizations. Through a variety of lectures and approaches, participants will gain expertise in the "thought" regarding social issues, the "skill" to actually put a project together, and the "dialogue" with others in the interest of creating a shared sense of the questions to be faced.

6月より開講中の「基礎プログラム」では、仕事を知る、現場に出会う、思考を深める／想像を広げる、情報収集力を身につける、の4つのアプローチから、思考と技術の対話の基礎力を磨いていきます。

The basic program, began in June, take four approaches, "Knowing the Job", "Encountering the Site", "In Search of Insight" and "Gathering Information" and create the foundation for dialogue regarding theory and technique.

仕事を 知る Knowing the Job	現場に 出会う Encountering the Site
情報収集力 を身につける Gathering Information	思考を 深める In Search of Insight

予告

集中講座

Intensive Lecture Series

日程：2014年9月予定
会場：東京文化発信プロジェクト
ROOM302 (3331 Arts Chiyoda 3F)
問い合わせ：080-3171-9724 (TARL事務局／
一般社団法人ノマドプロダクション)

Dates: September, 2014 (planned)
Venue: Tokyo Culture Creation Project Room 302
Information: Tokyo Art Research Lab Office/
Nomad Production 080-3171-9724

チームづくりや資金調達、リスクマネジメントや情報発信、アーカイブや評価・検証についてなど、各専門分野のゲストと、アートプロジェクトの運営基盤を整えるための「技術」を学ぶ2日間のプログラム。

A two-days program in which participants learn techniques necessary to formulating the basics of an art project administration. Topics include forming a team, fundraising, risk management, and generating information, archiving, evaluating, and verification. Specialists in each field serve as guest lecturers.

9月

Sep.

予告

『日本型アートプロジェクトの歴史と現在
1990年→2012年』を読む

Reading "Japanese Art Project, Then and Now: 1990 to 2012"

2015年1～2月

Jan.-Feb., 2015

日程：2015年1月～2月予定 (全5回)
会場：東京文化発信プロジェクト
ROOM302 (3331 Arts Chiyoda 3F)
問い合わせ：080-3171-9724 (TARL事務局／
一般社団法人ノマドプロダクション)

Dates: January - February, 2015 (planned) Total of
5 lectures Venue: Tokyo Culture Creation Project
Room 302 Information: Tokyo Art Research Lab
Office/Nomad Production 080-3171-9724

熊倉純子 (東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科教授) をコーディネーターに迎え、現代の日本におけるアートプロジェクトについてまとめられたテキストを、ゲストとともに読み解きます。

Sumiko Kumakura, Professor of Musical Creativity and the Environment, Faculty of Music, Tokyo University of the Arts, will serve as coordinator, joining with guests to read and expound on texts relating to the current status of art projects in Japan.

コラム

東京アートポイント計画
プログラムオフィサー
坂本有理

Tokyo Artpoint Project
Program Officer
Yuri Sakamoto



TARLの学校では、アートプロジェクトを担う人々が基礎力を身につけるためのさまざまなプログラムを展開中。公式サイト tarl.jp では、講座のドキュメントや、アートプロジェクトのための教本・ガイドラインを公開しています。ぜひご活用ください。

The TARL school has in operation a number of programs aimed at teaching the fundamentals to those who administer art projects. Lecture readings, along with teaching materials and guidelines relating to art projects are available online at tarl.jp.

ブンプロ室長 江川秀章

Senior Director
Hideaki Egawa



ブンプロは、東京で人とアートをつなぐお手伝いだけではなく、文化事業をつくり、人をつくり、組織をつくっています。その“てづくり感”こそ、ブンプロらしさと言えるでしょう。新しい手法を用いて東京文化をつくっていくために。そして2020年に東京オリンピック・パラリンピックを迎えた後も、日本と世界をアートでつなげる人材を育てていくために、ブンプロの挑戦は、これからも続いていきます。

BUNPRO links people with art in Tokyo, and creates cultural projects, staff, and organizations. It is this sense of creating that most typifies BUNPRO, with its aim of creating Tokyo culture using new methods. Even after the 2020 Tokyo Olympics and Paralympics have come and gone, BUNPRO's quest to create human resources linking Japan and the rest of the world through art will go on.

東京アートポイント計画ディレクター 森 司

Tokyo Artpoint Project Director
Tsukasa Mori



「川を越えると文化が変わる」と感じるほど、江戸から脈々と受け継がれてきた東京文化には地域性が残っています。私が大切にしたいのは、生活の中にある価値観をアートとして提示していくことで、日常をより豊かにすること。古き良き風情が香る場所、都市開発が進む場所と、それぞれの街の魅力をひきだし、発信するような文化プログラムを開発し、暮らしの選択肢を広げていきたいですね。

"Cross a river, go into another world", even today the different parts of Tokyo that have inherited those Edo cultures retain a strong sense of local identity. I want to bring out the appeal of every part of Tokyo, from its long-established neighborhoods redolent of the good old days to areas that are still being developed. I want to develop programs, and which widen the options available in life here.

キーパーソン
4人が語る

ブンプロ

BUNPRO

TOKYO
CULTURE

東京文化

文化研究員が、研究対象であるブンプロに潜入！そこで出会った、4人のブンプロ・キーパーソン。東京で育みたいもの、ブンプロが目指すことを教えてくださいました。

Cultural researchers infiltrate the BUNPRO, meeting four of its key people, who tell them what BUNPRO aims at, and what BUNPRO would like to foster in Tokyo.

プログラムディレクター 山口紀子

Program Director
Noriko Yamaguchi



私にとって東京は「働く場所」「生活する場所」でしたが、この仕事に就いてから、「文化に触れる場所」でもあると実感しました。気分転換したい時、行き詰った時に、文化に触れることで世の中の見方が変わったり、目の前が開けたりすることも。東京文化をもっと知って、体験して、楽しんでもらいたい。そういう機会を増やすのが、ブンプロの役目だと思っています。

For me Tokyo was a place to live, but since I've taken up this job I've come to feel that Tokyo is also a place to encounter culture. When I want a change of pace, when I feel blocked, exposure to culture changes my way of looking at the world. I want to help people know Tokyo culture, experience it, and enjoy it more. I believe it is the role of BUNPRO to expand the opportunities for doing that.

広報ディレクター 森 隆一郎

Public Relations Director
Ryuichiro Mori



私たちが取り組んでいるプロジェクト型の「アート」は、トランプの「ジョーカー」みたいな存在だと思うんです。はみ出した存在なのに、無いとゲームが面白くない。ここ数十年、日本の社会は機能的に細分化されて生産性や技術レベルを上げてきました。一方で顕在化する課題のジャンルは多様で複雑です。アートはその課題同士をつなげたり混ぜたりする、切り札的存在なのだと思います。

I think the project-style "arts" we are involved with is like the joker. It makes the game interesting. Over the past decades, Japan has increased its level of productivity and technology through fragmentation of function. On the other hand the types of issues that emerge have become more varied and complicated. I believe that "arts" is in fact a trump card, linking those issues.